小川環樹先生の漢詩

深澤一幸

一

小川環樹先生（一九一〇－一九九三）、字は士解、地質學者で京都帝國大學教授の小川琢治の四男として、京都市でお生まれになった。長兄は小川芳樹東大教授（金屬工學・冶金學）、次兄は貝塚茂樹京大教授（東洋史學）、三兄は湯川秀樹京大教授（物理學）、五男小川滋樹は、太平洋戰爭で戰病死。先生は、昭和三年（一九二八）、第三高等學校を卒業、昭和七年（一九三二）、京都帝國大學文學部を卒業され、同大學院文學研究科修士課程に進學、昭和九年（一九三四）、同博士課程に進學された。昭和九年（一九三四）から一一年（一九三六）にかけて、中國に留學、はじめは北京大學・中國大學を聽講、のち蘇州語學習のため蘇州に滯在された。昭和一三年（一九三八）、東北帝國大學講師に就任、昭和一四年（一九三九）、同助教授、昭和二二年（一九四七）、同教授。昭和二五年（一九五〇）、東北大學を退官し、京都大學文學部教授に就任された。昭和四二年（一九六七）、吉川幸次郎教授の退官をうけて、中國語學中國文學科主任教授。昭和四九年（一九七四）、京都大學を定年退官された。その後、京都產業大學・佛教大學で講義されるとともに、蘇軾の詩を讀む讀蘇會を開かれ、昭和六一年（一九八六）には、蘇軾の足跡をめぐって北京から四川にまわり、三峽下りもされた。主要著作は「小川環樹著作集」全五卷（筑摩書房、一九九七年）にまとめられている。

さて、昭和二九年から始まる先生と中國の詞學の權威たる龍榆生氏との詩の唱和については、わたしはすでに論文「海を越えた唱和――龍榆生氏と吉川幸次郎・小川環樹兩先生――」（「中國文學報」第八五册）で詳述した。そこで本文では、それ以外の先生の漢詩を紹介することにする。

まず昭和二三年、先生がまだ仙臺の東北大學教授であら

れた時の作が、金田純一郎氏の「思ひ出すまゝ」（「小川環樹著作集」第一巻月報）に載っている。先生が昭和二四年元旦に金田氏に送られた葉書には、

昨年十一月下旬表記の處に轉宅、やはり二間を借りただけで不自由ながら大崎八幡宮に近く山を目近に眺め風光はわるくありません。移居の一絶を左に、

とある。「大崎八幡宮」は仙臺の總鎮守として伊達政宗の寄進により建立された神社で、仙臺市青葉區八幡、つまり仙臺の西北にある。そして移居の詩は、

楓葉經霜色倍新　楓葉は霜を經て色倍ます新たに
背山臨水絶紅塵　山を背にし水に臨みて紅塵を絶つ
閉居猶苦人境近　閉居　猶お人境に近きに苦しみ
轆轆車聲驚夢頻　轆轆たる車聲　夢を驚かすこと頻りなり

第三・四句は、陶淵明の「飲酒」其の五に「廬を結びて人境に在り、而も車馬の喧しき無し。君に問う何ぞ能く爾ると、心遠ければ地は自のずと偏なり」とあるのをふまえる。

ところで、先生がご自身の漢詩發表の主要な場とされたのは、東京の中野在住の漢學者・漢詩人たる今關天彭氏が主宰していた漢詩雜誌「雅友」である。先生は今關氏とは、「雅友」に參加する二十年ほど前に、上海の虹口北四川路底施高塔路にあった內山書店で對面されていた。しかもあの魯迅も同席していたのだ。先生が中國留學時代の思い出を口述された「留學の追憶——魯迅の印象その他」（「飈風」第十八號、一九八五年二月）から關係する一段をあげよう。

そのあと、日記に記錄してありますのは、その次の一月、一九三六年ですな。一月二十七日に內山書店へ行った。そしたらそこに魯迅がいて、そして今關氏、今關天彭氏でしょうな、今關氏と話している、談話中だ

ったと書いてあるだけなんですが。今關氏にはぼくそこで初めてお目にかかったんです。そのころの魯迅の日記にたぶん書いてあると思いますね、今關天彭に會ったということ。一九三六年の一月二十七日。今關さんはたぶん魯迅をもっと前から識っておられたと思いますがね。日記にはありませんか。ほんとですね。「無事」と書いてある。このころちょっと調子が悪かったからね、あんまり詳しく書いてないんでしょう。だんだんともう會った人全部は書いてないわけやね。何を話しておられたかはもう全然記憶がありませんけど。

この内山書店での先生との邂逅は、今關氏にも強い印象を與えたようで、その自宅で開かれた座談會の記錄「學問の思い出――今關天彭先生を圍んで」（「東方學」第三三輯、昭和四二年一月）の今關氏最後の發言にはいう、

君（山口一郎）の美少年ぶりが目の前に見えますよ。あの前後と思う、やはり内山書店であったかな、小川環樹さんにも會いましたが、これまた美少年でしたね。蘇州語をやるとかいっていたような記憶がある。

このような經緯で、先生は「雅友」の同人になられたようだが、まずは龍榆生氏との諸詩につづいてその第二四號（昭和三〇年九月）に掲載された「今西博士に過る」詩をあげよう。その序文にいう、

乙未二月廿六日、宮崎〔市定〕・吉川〔善之〕・重澤〔俊郎〕三教授に陪して、今西君〔春秋〕を美濃の池野村莊に訪ぬ。君は故博士君〔龍〕の哲嗣也。博士は曾つて學を清人柯鳳孫〔劭忞〕に問いて三韓古史を研究し、京城大學の講席を主どる。君は夙に家學を承け、復た力を有清開國の事蹟に致し、考證縝密なるを以って稱さる焉。燕都に留滯すること二十年に垂んなんとす。去歳歸るを得るも、積稿は盡とく失い、幽憂は殊に深し。博士の舊宅は、揖斐河畔に瀕し、列樹は森然

たり。藏書は甚はだ富み、經史自り外、尤も高麗の舊槧多く、「詩人玉屑」の如きは、是れ麗人が我邦の正中刊本を仿刻せし者にして、實に稀世の珍也。繙玩して時を移し、日暮れて反る。園中の二墳、一は博士の石塔爲りて、碑銘は故内藤炳卿博士の書せる所。又一は博士先考の埋骨處爲りと云う。

「乙未」は昭和三〇年、一九五五年、「二月廿六日」は舊曆か。宮崎市定は東洋史の、吉川幸次郎（字は善之）は中國文學の、重澤俊郎は中國哲學の教授で、先生にとってはいずれも京都大學文學部の同僚である。訪問先の池野村（いまの岐阜縣揖斐郡池田町池野）の主たる今西春秋（一九〇七－一九七九）は、滿文文獻研究者で、中國から歸國したばかりの天理大學教授。一九三三年、京都帝國大學東洋史學科を卒業、内藤湖南「炳卿博士」に師事し、明清の滿州史を專攻。一九三八年、中國に留學、滿蒙資料の調査收集にあたった。一九四〇年から四五年まで北平大學教師をつとめ、終戰後も留任し、一九四九年の北京解放後、刑法を犯したとして逮捕され、獄中に入った。一九五四年、戰犯を本國に返還するということで歸國し、同年、天理大學教授になった。著作は「滿日對譯滿洲實錄」「滿日對譯滿文老檔」「校注異域錄」「五體清文鑑譯解」など。

かれの父君にして、詩題の「今西博士」たる今西龍（一八七五－一九三二）は、朝鮮史研究者、京都帝國大學教授。岐阜縣生まれ。東京帝國大學卒業。一九〇六年より慶州などで考古學調査を行い、一九一三年、秸蟬縣碑を發見。同年、京都帝大講師となり、一九一六年、助教授。一九二二年から二四年まで北京に留學。一九二六年、京城帝國大學教授・京都帝國大學兼任教授となるが、五八歲で死去。著作は「新羅史研究」「百濟史研究」「朝鮮史の栞」「朝鮮古史の研究」など。

今西博士が學を問うた柯劭忞（一八四八－一九三三）、字は鳳蓀、號は蓼園は、山東膠州の人。光緒十二年の進士で、翰林院編修・京師大學堂監督・清史館總纂などを歷任した。その學問は廣博で、もっとも元史に詳しく、獨力で「新元史」を編著し、「清史稿」を完成させた。

「詩人玉屑」二十一巻は、南宋の魏慶之が同時代の詩歌評論「詩話」を集めたもので、詩辯・詩法などの項目ごとに南宋人のコメントを配列する。ここで小川先生らが目にされた「詩人玉屑」は、今西春秋氏の勤務先たる天理大學附屬天理圖書館に巻十九から巻二十一の三巻一冊を所藏する、正中元年（一三二四）の跋ある南北朝末期覆南宋刊本を覆刻した李朝中期正統四年刊の朝鮮版だろう。「天理圖書館稀書目錄」和漢書之部第四（平成十年十月）によれば、「今西龍所得」「今西春秋圖書」などの印記がある。

詩の本文をあげれば、

滿目平蕪綠　滿目　平蕪綠にして
村園野水涯　村園　野水の涯
亭亭春樹暗　亭亭として春樹暗く
藹藹夕陽斜　藹藹として夕陽斜めなり
宿草綠雙塚　宿草　雙塚綠に
遺書富五車　遺書　五車に富む
衡門分手處　衡門　分手せし處
黯淡白梅花　黯淡たり　白梅の花

「亭亭」は直立するさまで、後漢の劉楨の「從弟に贈る」詩に「亭亭たり山下の松、瑟瑟たり谷中の風」とある。「藹藹」はほの暗いさまで、謝莊の「月賦」に「青質の悠悠たるを升らせ、澄輝の藹藹たるを降ろす」とある。「遺書富五車」は藏書の多いことと、主人の學問が深いことをいい、「莊子」天下篇に「惠施は方多く、其の書は五車」とある。

また、同じく「雅友」第二四號の「風月往來」には「小川環樹氏の洛下詩信」と題して、京都で開催された詩會の先生による報告が載っている。

四月十日大阪の風月吟社、別才社、成蹊吟社および京都の清社の聯合詩會は京都市西郊嵐山渡月橋畔故川村曼舟畫伯宅の撫松庵において開かれた。山櫻はすでに盛時をすぎてはいたものの、遊人雜沓の中を、奈良・滋賀の各地よりも參集された詩客十八人、鈴木豹軒博

士をかこんで高談雄辯、席上に風を生ずるの概があり、壁間にかかげられた老博士の大篇をはじめ、あるいは南畫の揮毫にあるいは詩簡の唱酬に、また各自韻を拈つて柏梁體の聯句の吟詠に、竟日の歡をつくして夕刻散會した。つぎに聯句の全韻を錄して參會者の題名にかえる。

「川村曼舟」は近代京都の日本畫家（一八八〇-一九四二）で、本名は萬藏。山元春擧に師事し、山水畫にすぐれ、「竹生島」「日本三景」が文展で連續特選となる。京都市立美術工藝學校の助教諭・教諭、京都市立繪畫專門學校の教授・校長をつとめた。その邸宅「撫松庵」は、いまは豆腐料理屋「松ヶ枝」になっている。

「鈴木豹軒博士」は、小川先生の京都帝國大學での恩師である鈴木虎雄博士（一八七八-一九六三）、號は豹軒、京都學派の中國文學研究の創始者。新潟縣西蒲原郡粟生津村の出身で、一九〇〇年（明治三三）東京帝國大學文科大學漢學科卒業、一九〇八年（明治四一）京都帝國大學文科大學助教授に就任、一九一九年同教授、一九三八年定年退官。當時は京都大學文學部中國文學中國哲學卒業者の詩會「清社」の主宰者であり、また京都の淡社、大阪の成蹊吟社・風月吟社・別才社などの詩會を指導されていた。

なお、小川先生は「鈴木豹軒先生の詩學および詩風の一端」（上・下）と題する紹介文を、「雅友」第二一・二二號に掲載されている。

さて、以下には「撫松庵聯句　昭和乙未四月十日」と題して、すべての句が韻を踏む柏梁體の聯句が來る。

撫松庵集探韻先　撫松庵に集（つど）いて韻を探ること先んじ　鈴木豹軒

春在嵐光花影邊　春は嵐光花影の邊に在り　大橋香陵

隔溪嵐裏百花然　溪を隔てて嵐裏に百花然（も）え　中田義鄕

青紅交織極鮮妍　青と紅と交（こも）ごも織りて鮮妍を極む　西野貞治

山紫水明芳樽前
奔湍激石躍深淵
花下清江花外巔
把酒倚檻對長天
龍頭鷁首平記傳
爽氣西來詩思鮮
櫻花樹下童汲泉
簾幙參差巣燕穿
閑看魚鳥情可憐
悲閣鐘聲徧山川

山紫水明　芳樽の前　高橋魚鳥
奔湍は石に激(あた)りて深淵に躍る　辻蒼石
花下の清江　花外の巔　森谷星湖
酒を把(と)り檻に倚(よ)りて長天に對す
小川士解
龍頭（船）鷁首（船での舟遊び）
平記（平家物語か）に傳え　中村穆洋
爽氣は西より來たり詩思は鮮かなり　弘末樂齋
櫻花の樹下に童は泉を汲み　渡邊杏邨
簾幙は參差(しんし)として巣燕穿(うが)つ　相馬守愚
閑(しず)かに魚鳥を看れば情は憐れむ可く　木村東渠
悲閣（上流の千光寺大悲閣）の鐘聲は山川に徧し　林芸窗

嵐峽水清泛小船
嵐峽賞春年又年
罰杯頻到伴花眠
拾韻失韻總付烟

嵐峽の水清くして小船を泛べ　川村復軒
嵐峽に春を賞して年又た年　兔山洗耳
罰杯は頻りに到りて花を伴いて眠り　倉田宕山
韻を拾うも韻を失うも總べて烟に付す　橋川醉軒

大橋香陵女史は廣島の學者五弓雪窓の外孫で、日本畫家。西野貞治は大阪市立大學教授。辻蒼石は書畫家。木村東渠は木村英一大阪大學文學部教授。林芸窓は林雪光神戸市外國語大學教授。川村復軒は川村勝太郎天理大學教授。兔山洗耳は書畫家。倉田宕山は倉田淳之助京都大學人文科學研究所教授。橋川醉軒は橋川時雄大阪市立大學教授。その他は各吟社の同人と思われるが、未詳。

そして、「雅友」第二五號（昭和三〇年一一月）の「風月

往來」にも「小川環樹教授」の京都からの通信が載せられている。そこには先生の一絶も付載されている。

日前の清社例集は、席を洛中寶鏡寺に假る。主翁は自から茗盌を製し、出だして各おのに題名せしむ。豹軒師は「淡紅瞿麥」の四字を上に題さる。是の花は光格天皇の賜りし所、外間には見ること罕にして、他處に移蒔せば、輒ち色を變ずと云う。菊花文古器二盆は、今尚お寺に藏され、蓋し五百盆の僅に存する者也。席散じ、續けて一絶成る。錄出呈上し、敎正さるを幸いと爲す。

「寶鏡寺」は、京都市上京區寺之內通堀川東入にある臨濟宗系の禪宗寺院。室町時代の應安年間、光嚴天皇皇女の華林宮惠嚴の開山とされる。通稱は人形寺。境內には珍しい「瞿麥」伊勢なでしこが咲き、阿彌陀堂には光格天皇（一七七九－一八一六在位）敕作の阿彌陀如來立像が安置されている。

以下は小川先生の絶句。

淡紅瞿麥映青苔　淡紅たる瞿麥は青苔に映じ
御賜奇葩曾遍栽　御賜の奇葩は曾つて遍く栽えし
非是劉郎桃李種　是れ劉郎の桃李の種に非ざるも
年年爭發傍池臺　年年爭いて發し池臺に傍う

第三句は、唐の詩人劉禹錫の故事。劉の「元和十年、朗州自り京に至り、戲れに花を看る諸君子に贈る」詩に「玄都觀裏　桃千樹、盡とく是れ劉郎の去りし後に栽う」とあり、その後嶺南に流されてまた京にもどった折の作「再たび玄都觀に遊ぶ」絶句には「百畝の中庭　半ばは是れ苔、桃花は淨り盡くして菜花開く。桃を種えし道士は何處にか歸る、前度の劉郎は今又た來たる」とある。

そして「丙申」昭和三一年になると、「雅友」第二八號（昭和三一年七月）に、先生の「丙申人日、高齋の雅集、敬しんで豹軒師の原韻に步す」詩があり、その自注に「是の日、人見少華畫伯は坐に在り、先生（鈴木虎雄）の小肖を

出だし示され、故に五六は之に及ぶと云う」とある。豹軒先生が蘆屋に移られてより、清社の年頭の社集は人日、一月七日に、豹軒先生の新居で開催されるのが恆例だったらしい。殘念ながら、豹軒先生の當日の原詩は不明である。人見少華（一八八七－一九六八）は日本畫家。本名は勇市で、京都出身。京都市立繪畫專門學校卒業。明治四二年、文展で「八百屋のかど」が初入選。大正一〇年、日本南畫院創立後は同展を中心に活躍、「月中香夢」などを發表。池大雅の研究でも知られる。

人日草堂會　人日　草堂の會
春風度澗村　春風　澗村を度（わた）る
邀朋越阡陌　朋を邀えて阡陌を越え
攜手訪丘園　手を携えて丘園を訪う
摩詰筆猶灑　摩詰　筆は猶お灑ぎ
少陵道永存　少陵　道は永しえに存す
愧無問字酒　愧ずらくは字を問う酒の無く
花氣發盈樽　花氣　盈樽に發するを

「草堂」は「高齋」で、杜甫の浣花草堂を杜甫全詩注釋の完成者たる豹軒先生が前年に引っ越された蘆屋市岩園町の閑居になぞらえる。そこは、六甲山の麓で、定期的に詩會が開かれていた。「摩詰」は畫にもすぐれた唐の詩人王維で、人見畫伯にたとえる。「少陵」は唐の大詩人杜甫で、畫伯に肖像を描かれた豹軒先生にたとえる。「問字酒」は、漢の學者揚雄の故事。「漢書」揚雄傳によれば、揚雄が天祿閣で書物の校訂をしていたとき、古文・奇字を多く知り、劉歆の息子劉棻はかれから奇字を學んだ。時には好事の者が酒肴を携えてかれのもとに學びに來たという。宋の陸游の「小園」詩にはそれにちなんで「客は字を問うに因りて來たり酒を携え、僧は題を分かつを趁（お）いて就きて詩を賦す」とある。

また同じく「雅友」第二八號には、同じく先生の「復た豹軒師の人日絶句の韻を用い、率爾として懷いを述ぶ」詩があり、その自注に「同人は先生の退休集十七卷を編印し、予は忝じけなくも校刊の役に預かる」といわれる。この豹軒先生の「人日絶句」も不明。「退休集」は、鈴木先生喜

壽記念會編「豹軒退休集」（弘文堂、昭和三六年）で、豹軒先生が京都大學を退官された昭和一三年から昭和二九年まで一七年間の詩七千餘首を收錄。先生は「雅友」第二九號に「豹軒退閒集について」と題する一文を寄せておられる。

何減劍南萬首詩　兼收竝蓄總無遺
何んぞ減ぜん　劍南萬首の詩に　兼ねて收め竝びに蓄え總べて遺す無し

校成玩讀忘疲倦　半夜燈前漏盡時
校成りて玩讀し疲倦を忘る　半夜　燈前　漏盡くる時

「劍南」は南宋の詩人陸游をいう。かれはみずから「六十年間萬首の詩」といい、その詩集「劍南詩稿」には九千三百首あまりを收める。

ここで先生の詩を讀む參考として、吉川先生の前年の作「豹軒師の移居詩に和す四疊」（「吉川幸次郎全集」第二十卷「知非集甲」昭和三十年乙未）の第一疊をあげよう。

萬首詩成鬱鬱文　放翁之後未前聞
萬首の詩は成す鬱鬱の文　放翁の後には未まだ前聞せず

卜居還似山陰宅　一曲鑑湖依水雲
居を卜するも還た似たり山陰の宅　一曲の鑑湖は水雲に依る

「放翁」は陸游の號で、「山陰」は陸游の故鄕紹興、「鑑湖」は當地の名勝である。ここは蘆屋の居宅のそばにある「仲ノ池」をたとえよう。

そして、「雅友」第二九號（昭和三一年七月）には、同僚と一緒の九州への旅を詠まれた「丙申春日西遊雜詩」三首を載せる。まず「車窓より見る所を記す」と自注される第一首。

朝發洛郊吾道悠　春風到處伴閑鷗
朝に洛郊を發して吾が道は悠なり　春風の到る處　閑鷗を伴う

沙邊晒網幾灣曲　松下垂綸一棹舟
沙邊に網を晒す　幾灣の曲　松下に綸（いと）を垂る　一棹の舟

淡淡嶺雲半天散
淡淡たる嶺雲は天に半ばして散じ

巍巍城堞帶川浮　巍巍たる城堞は川を帶びて浮かぶ
車行瞬息前程近　車行は瞬息にして前程近く
暮靄西垂是九州　暮靄の西垂は是れ九州

つぎは「別府溫泉の作」と自注される第二首。

山色水光晴最奇　山色水光　晴れは最も奇なり
坡公佳句正相宜　坡公の佳句は正に相い宜ろし
浴泉睡足滌塵累　泉に浴し睡り足りて塵累を滌い
起傍瓶中梅一枝　起きて傍う　瓶中の梅一枝

詩の前半については、宋の蘇軾の「湖上に飲み、初めは晴れ、後は雨」二首の第二首に「水光瀲灩として晴れは方に好く、山色空蒙として雨も亦た奇なり。西湖を把りて西子に比べんと欲すれば、淡妝濃抹　總べて相い宜ろし」とある。

つぎは「佐伯道中の作」と自注される第三首。

春淺籬邊遍著花　春は淺きも籬邊に遍く花を著け
成林橘樹望中賒　林を成す橘樹は望中に賒る
盈盈海水山城下　盈盈たる海水　山城の下
欲訪曾藏萬卷家　訪ねんと欲す　曾つて萬卷を藏せし家を

第四句には、先生の説明がある。

寶曆中（一七五一－一七六三）、豐後佐伯藩侯の毛利高標は、學を好むを以って名あり、收藏は極めて富み、海舶の齎す所は、搜羅して遺す無く、一時の貴顯も、儔匹有ること罕なり。侯は政に從うの暇に於いて、雅衍一帙を手編され、未まだ成らずと雖も、全稿は亦た張華博物の倫也。文政中（一八一八－一八二九）、嗣孫の高翰侯は、復た祕篋を啓き、其の上駟を擇んで江戸幕府に獻ず。凡て二萬七百五十八卷、目有りて世に傳わる。天水の佳槧、元明の舊刻、指は屈するに勝えず、而して「正統道藏」全函は、最も寶とす可きと爲す、

今は竝びに御府に歸す。聞くならく藩校の四教堂に儲えし所は、蓋し五萬卷を下らざるも、乃ち世變を經て、散亡し殆んど盡くと云う。予は宮崎〔市定〕・吉川〔善之〕・重澤〔俊郎〕三博士と、偕に往きて（大分縣）佐伯市公民館を訪ね、遺書を觀るを索むるも、僅かに十數部を存する耳。浩歎すること良や久しうして、遂に其の事を紀すこと右の如し。

第八代藩主毛利高標の收書は、天明元年（一七八一）に「佐伯文庫」八萬卷としてまとめられた。その「目」としては、京都大學文學部に「佐伯文庫書目」が傳わる。「張華博物」は、晉の張華が著した「博物志」十卷で、山川地理・飛禽走獸・人物傳記・草木蟲魚・神仙故事などを記す。

第十代藩主毛利高翰が江戸幕府に獻上した貴重書は、昌平黌・紅葉山文庫におさめられた。「正統道藏」は、明の英宗の正統十年（一四四五）に完成した現存する唯一の官修「道藏」で、五千三百零五卷、四百八十函、歷代の道教經典を三洞・四輔・十二類に分けて收錄、「千字文」を函目とし、「天」から「英」に及ぶ。

また、「雅友」第三〇號（昭和三一年九月）には、先生が京劇の名女形たる梅蘭芳の公演を梅雨時にテレビで見ての感想を詠まれた「梅畹華は東京に至りて藝を奏す。偶たま電視の放映を觀て、戲れに一絕を詠む」詩を載せる。梅蘭芳は周恩來總理の指示により、訪日京劇團の團長として來日した。

乍聽胡琴不自持　燕都舊事夢難追
歌臺影裏人如玉　正是洛城梅雨時

乍ち胡琴を聽きて自から持せず　燕都の舊事　夢は追い難し
歌臺影裏　人は玉の如く　正に是れ洛城梅雨の時

第二句からみると、先生は留學中に「燕都」北京で梅氏の公演をご覽になったのだろうか。

ここで、當年、京都の南座でじっさいに梅氏の公演をご覽になった吉川先生の「南座觀劇絕句」五首（「知非集甲」昭和三十一年丙申）から第二首を參考にあげよう。

歌聲當日徹雲霄　歌聲　當日　雲霄に徹せり
舊夢宣南魂可招　舊夢　宣南　魂は招く可し
銅狄堪摩人未老　銅狄は摩するに堪えて人は未まだ老いず
梅郎風骨愈迢迢　梅郎の風骨は愈いよ迢迢たり

この詩について、吉川先生は「南座觀劇絶句」（「吉川幸次郎全集」第十六巻）で次のようにパラフレーズされる。

私がこのまえ梅氏の「洛神」をきいたのは、北京宣武門の南の戲場においてであり、それも二十年前となったが、大空につきとおるような聲には、ただ今も魂をすいよせられそうである。長安の町の銅の像を仙人がなでまわしているうちに、世の中は夢のようにかわってしまったというが、そのように時間はどんどんたち、世の中はひどくかわった。しかし梅團長のみずみずしさは、六十をこした人とは思えぬ。

「宣南」は北京城内の西南にあたり、文人の集まる地區だった。「銅狄」は方術の士薊子訓の故事。「後漢書」薊子訓傳に「後人は後に長安東の覇城に於いて之を見るに、一老翁と共に銅人を摩挲し、相い謂いて曰わく、「適たま此れを鑄せしを見るに、已に五百歲に近し」と」とある。

そして、昭和三二年七月、小川先生は吉川先生とともに、アメリカから京都にやって來た舊知の學者、ハーヴァード大學燕京講座教授の楊聯陞氏（一九一四－一九九〇）と學術交流され、かれが歸國するにあたり京都の學者たちが開いた送別の宴席で、楊氏の王維ばりの作にそれぞれ唱和された。楊氏の隨筆集「哈佛遺墨」（商務印書館、二〇一三年一〇月）に收められた楊氏の詩は「陽關曲の平仄を以って詩を賦し日本の學人に贈る」と題する。「陽關曲」は唐の王維の「元二が安西に使いするを送る」七言絶句で、末句に「西のかた陽關を出ずれば故人無からん」とあるのでこういう。のち送別の宴席がお開きになるときに歌われるようになり、楊氏もその慣習にしたがったのである。この詩に付された編者の注にはいう、

一九五七年七月、日本の京都に在いて、哈佛燕京學社の爲に東亜研究會を組織し、專家に計を獻ずるよう請う。當地の學人の招待を受け、行に臨む前に桃源亭に在いて宴を設けらる。諸多の學人が出席す。

「哈佛燕京學社」は、ハーヴァード大學がアルミニウム企業の創始者チャールズ・マーティン・ホールの遺産をもとに建立し、北京の燕京大學と提携して、雙方が學者を派遣しあい、中國學を研究し、東西の文化交流を推進する組織。「桃源亭」は、おそらく四條河原町下ル西側にあった中華料理屋「桃園亭」だろう。楊氏の作詩はといえば、

古都風味古人心　古都の風味　古人の心
遠客初來已解襟　遠客は初めて來たり已に襟を解く
欲行轉勸一杯酒　行かんと欲して轉た勸む　一杯の酒
情比桃花潭水深　情は桃花潭水比も深し

「古都」は京都、「古人」はそこに住む京都の學者たち。「解襟」は、襟元を廣げてくつろぐこと。第三句は、「陽關曲」の第三句「君に勸む更に盡くせ一杯の酒」による。第四句は、李白の「汪倫に贈る」詩の「李白は舟に乘り將に行かんと欲し、忽ち岸上の踏歌の聲を聞く。桃花潭水深さ千尺、汪倫が我を送る情に及ばず」による。

これに和された吉川先生の作は、

議論縱横叶冰心　議論は縱横　冰心に叶い
紛綸今古滿胸襟　紛綸たる今古　胸襟に滿つ
明朝又是重洋隔　明朝は又た是れ重洋を隔つ
怎不銜杯向夜深　怎でか杯を銜みて夜深に向かわざらん

前半は、楊氏の議論の才智と歴史全體の把握。「冰心」は、冰のように清らかな心で、唐の王昌齢の「芙蓉樓にて辛漸を送る」詩に「洛陽の親友が如し相い問わば、一片の冰心は玉壺に在り」とある。「紛綸」は入り亂れるさま。

同じく和された小川先生の作は、

陽關一曲古傷心　陽關の一曲　古しえより心を傷ましめ
酒罷披衣自斂襟　酒罷りて衣を披き　自のずと襟を斂ただす
人人盡說江南好　人人は盡とく說く　江南は好ろしと
此意惟君知最深　此の意は惟ただ君のみ知ること最も深し

第三句は、唐の韋莊の「菩薩蠻」詞五首の第三首に「人人は盡とく說く　江南は好ろしと、遊人は只だ合まさに江南に老ゆべし。春水は天より碧く、畫船　雨を聽きて眠る。壚邊　人は月に似たり、皓腕は霜雪を凝らす。未まだ老いざれば鄉に還る莫れ、鄉に還らば須からく腸を斷つべし」とある。韋莊の故鄉は首都だった長安だが、黃巢の反亂軍が長安を蹂躙したのちは「江南」一帶を放浪し、さらに四川に入り、二度と故鄉に還ることはなかった。楊氏にとっての「江南」は、アメリカ、とくにボストンかもしれない。

第四句の「此の意」は、とくに韋莊の末句が響いていよう。當時、一九五七年六月から、楊氏の「鄉」たる中華人民共和國では、いわゆる反右派鬪爭が展開され、批判の矢面に立たされた胡適氏の親友であって當然右派と目される楊氏が「還」れる狀況にはなく、海外華人の楊氏はこの二句の意味合いをより深く知念したにちがいない。

その翌年「戊戌」昭和三三年には、小川先生はまた友人、當時九州大學教授だった濱一衞氏、とともに九州旅行をされ、それを詠んだ「戊戌の初冬、友人と柳川市に遊ぶ。溝渠は四通し、河邊の列樹は皆な柳なり。昔日の蘇・杭の道中風景と殊ならざるを回憶し、目に觸れ感を生ず」詩を「雅友」第四一號（昭和三四年五月）に寄せられた。

漁家晒網趁新晴　漁家は網を晒して新晴を趁おい
野鶩浮浮河上盈　野鶩は浮浮として河上に盈みつ
彷彿江南秋盡日　彷彿たり　江南　秋盡くるの日に

夕陽衰柳自含情　　夕陽　衰柳　自のずから情を含む

この柳川旅行については、先生は「冬の柳川」（「文藝春秋」一九五九年二月）の一文で、詳しく回想される。その最後にもこの詩を引かれるが、第二句は、蘇軾の「初冬の作、劉景文に贈る」詩の「一年の好景　君須からく記すべし、正に是れ橙黄橘緑の時」により、「橘緑橙黄枝上盈」橘は緑に橙は黄にして枝上に盈つ、と改められ、第四句の「含」を「有」に改められている。

さらに數日後の吟詠「越すこと數日にして、鹿兒島に至りて宿す。明月復た宮崎に往き、車中偶吟す」詩がある。

行行南國未知冬　　行き行きて南國は未まだ冬を知らず
櫻島雲烟奇似龍　　櫻島の雲烟は奇なること龍に似たり
溪樹丹黄天更碧　　溪樹は丹黄にして天は更に碧く
亂山缺處見神峰　　亂山の缺けし處に神峰を見る

そして昭和三五年（一九六〇）には、先生は京都北郊の上賀茂神社で開催された「三月上巳曲水の宴」において、七絶を詠まれた。「雅友」第四八號（昭和三五年八月）に載せる倉田淳之助氏の當日の通信「曲水流觴記」によれば、この前年、清社の年頭の社集で、曲水流觴の事に話が及び、そこで倉田氏が京大同期の上賀茂神社神官の井出岩多氏に話を持ちかけて、實現したものである。四月一七日（日曜）、御手洗川の南折點から東に伸びる澤田川を會場とし、和歌の吉井勇氏、俳句の鈴鹿野風呂氏、畫の堂本印象氏も參加、數百人の見物客があつまった。漢詩は、倉田氏が披講となり、出場者は五名。豹軒先生のほかに、清社から小川環樹（南畝）・木村英一（東渠）、成蹊吟社から鹿内健三（圖南）・水野平次（靜堂）の四氏。みな衣冠束帶に身を固め、中下流に陣取った。準備がおわると、禰宜が「三月上巳曲水宴」の題を披露し、合圖を受けた童子は羽觴を曲水に浮かべ、第一詠者の前で竹杖をもって止めて取り上げ、神職に渡し、神職が詠者に酒をすすめ、第二詠者にと順次にすすむ。このとき管弦の樂が奏でられる。流れは八十

メートルだが、羽觴が進むのに時間がかかり、推敲もできたようである。四十分ほどで羽觴は二回流された。「流觴記」には、豹軒先生の長文「上賀茂別雷神祠復興修禊序」と「別雷神祠修禊式典」七律、四氏の七絶を記録している。そこから、先生の「三月上巳曲水の宴」詩をあげよう。

曲水脩成復舊蹤　曲水　脩め成りて舊蹤に復し
群賢列坐改儀容　群賢は列坐して儀容を改む
泛觴吟詠兼揮筆　觴を泛べて吟詠し兼ねて筆を揮い
鳳管聲聲穆肅雍　鳳管の聲聲は穆肅雍

「鳳管」は笙の美稱、形が鳳翼に似、音が鳳鳴に似るので、こういう。南朝宋の鮑照の「廬山に登る二首」の第二首に「聽を鳳管の賓に傾け、緬かに釣龍の子を望む」とある。「穆肅雍」は、後漢の「魯相の史晨の孔子廟に饗する碑」に「雅歌吹笙、之を六律に考うれば、八音は克く諧い、邪を蕩いて正に反し、爵を奉じて壽を稱し、相い樂しむこと終日。于穆肅雍、上下は福を蒙むり、長く利貞を享け、天と與に極まる無し」とある。

二

さて、以上に紹介してきた先生の諸詩は、いずれも鈴木虎雄博士の直接あるいは間接の指導鞭撻とおそらく無關係ではあるまい。しかし鈴木博士は昭和三八年一月二〇日に死去された。そこで、これからの諸詩は、先生獨自の歩みといってよかろう。

「甲辰」昭和三九年（一九六四）、先生はアメリカからヨーロッパにかけて旅行されたが、その折の諸作を「雅友」第六四號（昭和四〇年五月）に寄せられた。この旅行については、歸國後の昭和三十九年十月に先生が配られた「歸國の御挨拶」（「小川環樹著作集」第五卷）でその行程を述べられている。まずそれをあげよう。

拜啓　秋ふかまりましたこのごろ　御尊家皆様いよいよ御健勝の御事と存じます　さて私今年一月二十日東京を出發し　合衆國カリフォーニア大學（バークレ

イ）で一學期の講義をどうやら終えました後　シアトルを經てニューヨークに參り　七月二十六日歐州にわたりました　コペンハーゲンよりモスコーに入り　八月一日より　第七回國際人類學・民族學會議に出席のち　レニングラードで多數の敦煌寫本を一見することができましたのは　最大の喜びでございました　八月十八日モスコーよりウィーンに出　チューリッヒを經てパリに着き　九月一日より五日までボルドーで開かれた第五回中國研究會議にも出席いたしました　そののちロンドンよりドイツの二三の都市を通って又コペンハーゲンより北極まわりで九月二十一日無事羽田に歸着しました　およそ八個月のあいだ不在でございましたから　御迷惑をかけた方々は多いと存じます

また歐米諸國において御在留の方々にもお世話になりましたこと　合せて心からお禮とお詫びを申し上げます　延引ながら右御挨拶まで

なお別紙は旅行中の拙い作でございますが　お笑い草までにお目にかけます

御叱正いただけましたら幸いに存じます

この後に先生は立派な漢文の「御挨拶」も載せておられる。それもあげれば、

敬みて啓すらく、環此次美に旅するや、殆ど半載を逾ゆ。叨くも不棄を承け、屢しば盛餞を荷き、關注の殷切なること、私心に銘刻して、何れの日か能く忘れん。復た遊歐の行有りて、將に二月に近からんとし、九月二十一日に安らかに東京に抵る。中間莫斯科に于いて第七屆國際人類學民族學會議に參加す。法國に入るに及び、又た波爾多に于いて、第五屆國際漢學家會議に參加し、躬ら勝事に逢い、名流に見ゆるを獲て、高論を聆くこと多し、榮幸孰若ぞ、此を統べて鳴謝す。環旅中に作る所の俚句數首、茲に特に印出して附呈す。敬んで哂政を乞う。專ら肅んで告げ奉り、順せて撰祉を頌る。

この両「御挨拶」で「旅中」の「拙い作」「俚句」と謙遜されている漢詩こそ、「雅友」第六四號に發表されたものである。

はじめは「美」アメリカでの詩作「甲辰美に旅する絶句」四首である。まず「立春前十日、檀香山Honolulu海畔の作」と自注される第一首。

西風送我忽輕揚　西風　我を送りて忽ち輕く揚がり
萬里凌霄入異方　萬里　霄を凌いで異方に入る
椰樹成陰常夏島　椰樹　陰を成す　常夏の島
坐看日落太平洋　坐ろに看る　日の太平洋に落つるを

「陰」は「御挨拶」では「蔭」となっている。

つぎは「陽暦三月二十七日、紐約New York旅中の作。是の夕、房教授〔兆楹〕に承いて、新月酒家に遨び、餐し畢りて、月に歩みて寓に歸り、此を得たり」と自注される第二首。房兆楹コロンビア大學教授（一九〇八－一九八五）は、山東泰安の人。明清史と中國近代史の研究者。主要著作は「清代名人傳略」「明代名人錄」「中華民國人物傳記辭典」。當時はコロンビア大學の「明代傳記歷史計畫」に參加していた。「新月酒家」はニューヨークのミッドタウンのクレセント・グリル。なお、このころの先生の講學については、「アメリカで中國語をしゃべった話」（「以文」第十號、一九六五年一二月）に詳しい。

想見君家舉案齊　想見す　君が家の案を舉ぐると齊しきを
人間清福是雙栖　人間の清福は是れ雙栖
盈街月色流光促　街に盈つる月色　流光促り
孤客匆匆又欲西　孤客　匆匆として又た西せんと欲す

「舉案齊」は、後漢の梁鴻とその妻孟光のお互いの恩愛・尊敬の故事。「後漢書」梁鴻傳によれば、鴻は「人の

爲に舂くに賃われ、歸る毎に、妻は爲に食を具え、敢えて鴻の前に於いて仰視せず、案を擧ること眉に齊し」とある。房氏は北京の燕京大學數學系を卒業すると、同大學歷史系出身の杜聯喆女史（一九〇二－一九九四）と結婚し、一九三〇年代には夫婦でハーヴァード燕京學社の引得編纂に從事した。「雙栖」は夫婦仲良く暮らすこと。第四句は、この翌日三月二八日、先生はニューヨークを發ってカリフォルニアにもどられることが背景にある。

先生はこの詩を京都の吉川先生に送付されたところ、吉川先生はさっそく唱和の詩「小川士解教授は美國由り其の房兆楹夫婦に與えし詩を寄す。次韻して却寄す」二首（「吉川幸次郎全集」第二十卷「知非續集」昭和三十九年甲辰）を作られた。その第一首。

漠漠平沙天與齊　漠漠たる平沙　天は與に齊し
化城樓閣我曾棲　化城の樓閣　我れも曾つて棲む
想君始識詩人意　想うに君は始めて詩人の意を識り
落月屋梁頻望西　落月　屋梁　頻りに西を望まん

第一句は、アッパー・マンハッタンに位置するコロンビア大學からの眺めをいうか。「漠漠平沙」は、宋の陳亮の「漁家傲」詞に「漠漠たる平沙に初めて雁落ち、黃花濁酒情は何ぞ限らん」とある。

第二句、吉川先生も二年前の昭和三十七年（一九六二）十二月から、コロンビア大學客員教授としての招聘により、奥様とともに約四か月ニューヨークに滯在された。「化城」は、「法華經」化城喩品により、まるで魔法によって現出したような、摩天樓のそびえるニューヨークをいう。

第三句の「詩人」は杜甫で、その「意」は遙かに離れた友人李白を想う氣持ち。杜甫の「李白を夢む」二首の第一首に「落月は屋梁に滿ち、猶お顏色を照らすかと疑う」とある。

つぎは第二首。

層屋參差木末齊　層屋參差として木末に齊し
風光依約似唐棲　風光依約　唐棲に似たり
可曾清夢南屏到　曾つて清夢は南屏に到る可きや

江不錢塘湖不西　　江は錢塘ならず湖は西ならず

第一句は、杜甫の「成都府」詩の「曾城に華屋塡ち、季冬　樹木蒼し。喧然たる名都會、吹簫は笙簧に間わる」が裏にあるかもしれない。

「唐棲」は塘棲鎭で、杭州の北に位置し、文人輩出、物産豐富、江南十大名鎭に數えられる。「南屛」は、杭州西湖の南岸に位置する南屛山で、麓の淨慈寺の晩鐘が有名。杭州の南には錢塘江が流れ、西には西湖がある。しかし、そこは杭州ではなく、ニューヨーク、「江」はハドソン川、「湖」はセントラルパークの池である。

また、この旅行では、小川先生はボストンのハーヴァード大學で講演をされたが、そのときに發表の手助けをしてくれたのは、舊知のハーヴァード大學教授の楊聯陞氏であり、「アメリカで中國語をしゃべった話」にはいう、

ハーヴァード燕京學社では短い講演をする約束があった。この原稿を私はバークレイを發つ前、大いそぎで日本語のものを作って持っていた。これもI君（板坂元ハーヴァード大學教授）に相談し、日本語でしゃべるなら（日本文學研究者ハワード・）ヒベット氏が通譯してくれるはずだがどうだろうと言ったところ、それはむつかしいだろう。中國のことを日本語で話したのでは、という。結局、この原稿を楊聯陞氏に見せ、そのあらましを中國語になおして話すことにした。中國人でも學生ならいいのだが、學者たちもいる前で中國語でしゃべるのはいささか氣がひけたけれど、騎虎の勢い、おくめんもなく三十分ちかく何とかしゃべった。二、三分ごとに楊氏が英語に譯してくれ、これはまことにみごとなものだった。

この楊氏も、先生がニューヨークを發つ三月二八日、小川先生に送別の詩二首を贈った。「小川環樹教授に贈る二詩」（「哈佛遺墨」に收む）と題する。その第一首は、先生のハーヴァード大學の講演をうたう。

南詞或效齊梁體　南詞　或いは齊梁體に效い
北調誰翻敕勒川　北調　誰か敕勒川を翻せし
考古審音成獨賞　古を考み音を審らかにし獨賞を成す
千年萬里兩薪傳　千年萬里　兩つながら薪傳す

前半は、先生の講演の内容。「南詞」は、明清に浙江あたりで流行した、三弦の伴奏に合わせて七字句で物語をうたう歌曲。「齊梁體」は、南朝の齊・梁で出現した詩風。風雲月露・綺麗淫靡を題材とし、音律精細、對偶工整、辭藻巧艶を追求した。第二句には、先生の論文「「敕勒の歌」――その原語と文學史的意義」（「東方學」第十八輯、一九五九年六月）があり、北魏・北周・隋にわたり流行した鮮卑人の北歌「北調」、ひいては七言絶句と、北魏の敕勒部トルコ人の斛律金が歌い、もとはトルコ語だったものを中國語に翻譯した「敕勒川」ではじまる「敕勒の歌」との深い關係を論じておられる。

後半は、先生の學問への絶賛。このような研究は「獨賞」先生だけが成し遂げられるもので、「千年」の時間・「萬里」の空間にわたって傳わっていくだろう。

第二首は、先生との交情をうたう。

前歲西京同醉月　前歲は西京にて同に月に醉い
今宵共月在麻州　今宵は月を共にして麻州に在り
臨岐更作他年約　岐れに臨みて更に他年の約を作さん
不改青山綠水流　青山綠水の流れを改めずと

「西京」は日本の京都。「麻州」は、ハーヴァード大學の所在地ボストンのあるマサチューセッツ州。「青山綠水」は、「景德傳燈錄」卷二十五「杭州靈隱山淸聳禪師」に、僧が「牛頭が未まだ四祖を見ざる時は如何」とたずねると、師は「青山綠水」と答え、「見し後は如何」とたずねると、「綠水青山」と答えた、とある。

つぎはまた小川先生が「初夏、陳石湘教授〔世驤〕の良日山居に題す」と自注され、「柏克萊の作」である第三首。

陳世驤カリフォルニア大學バークレー校東方語文學系教授（一九一二―一九七一）は、字は子龍、號は石湘、河北灤縣の人。中國古典文學と中西比較文學の研究者。北京大學でイギリス文學を專攻、一九四一年、アメリカに渡り、コロンビア大學で中西文學理論を學ぶ。一九四七年からカリフォルニア大學で教鞭をとる。論文集「陳世驤文存」が出版されている。

また、陳氏はこれより七年前の一九五七年（昭和三二年）秋に來日し、京大文學部の中文研究室で十數回にわたって陸機の「文賦」に關する講話を行っていた。その內容は「中國文學報」第八冊（一九五八年四月）掲載の「陸機の生涯と「文賦」製作の正確な年代」（一海知義譯）に反映している。この時には、當然、小川先生と種々の交流があったことだろう。

倚欄遊目海風長　欄に倚りて目を遊ばせば海風長く
松鼠不驚山鳥翔　松鼠は驚かず　山鳥は翔る
四季如春花未老　四季　春の如く　花未まだ老いず
令人疑是入仙鄉　人をして疑わしむ　是れ仙鄉に入るかと

ここで、小川先生より二年前にこの陳氏の「山居」、サンフランシスコから東側の灣をはさんだ對岸のバークレーにあり、當時は「新居」を訪問された吉川先生の五律を、參考にあげよう。「十二月、哥倫比亞大學の聘に應じ、妻子を携えて美洲に赴く。三帆市を過ぎて、陳石湘夫婦の新居を訪い、楊蓮生の留題せし詩の韻を用う」（「知非續集」昭和三十七年壬寅）と題する。

水豈西泠止　水は豈に西泠止ならんや
齋居木末臨　齋居は木末に臨む
買山支遁興　山を買うは支遁の興
操縵卓君音　縵を操るは卓君の音
置酒斜陽好　酒を置けば斜陽好く
論文來雨今　文を論じて來雨今なり
四時芳草在　四時　芳草在り

隨意可行吟　　意に隨いて行吟す可し

楊氏が書きとめた吉川先生の初稿では「操」が「探」、「斜」が「夕」、「文」が「詩」、「四時芳草在」が「塢花榮歲暮」塢花は歲暮に榮く、に作る。

第三句は、晉の高僧支遁の故事。「高僧傳」巻四「竺法濳傳」に「支遁は使を遣し、仰山の側の沃洲の小嶺を買うを求めしめ、幽栖の處と爲さんと欲す。濳は答えて云う、「來たらんと欲すれば輒ち給するも、豈に巢（父）（許）由が山を買いて隱せしを聞かんや」と。」とある。

第四句は、漢の文人司馬相如が妻となる卓文君の前で琴の演奏をした故事。「史記」司馬相如傳に「是の時、卓王孫に女文君の新たに寡たる有り、音を好む。故に相如は繆りて令と相い重んじ、而して琴心を以って之に挑む」とある。「繆」は、琴の絃。司馬相如は風流才子たる陳氏をたとえ、卓文君は陳氏の再婚相手で「理想の妻」と稱された梁美眞女史をたとえる。陳氏初婚の相手は音樂家の姚錦新女史で、一九四二年に結婚したが、反共の陳氏と合わず、一九四七年にアメリカを去って中國にもどった。

吉川先生が次韻された「楊蓮生」、つまり楊聯陞氏の「留題」詩は、「晨に友人の園中に在りて散歩し詩を得たり」（一九六二年七月二七日、「哈佛遺墨」に收む）であり、「友人」陳世驤教授の「山居」のさまを活寫しているので、あげておこう。

園林宜勝友　　園林は勝友に宜しく
佳日共登臨　　佳日　共に登臨す
曲徑牽幽興　　曲徑　幽興を牽き
清言析雅音　　清言　雅音を析つ
月圓眞善美　　月は圓し　眞善美
花好去來今　　花は好ろし　去來今
陶醉金門客　　陶醉す　金門の客
席終更細吟　　席終わりて更に細吟す

「金門」は、ゴールデンゲイト・ブリッジのかかる場所で、「山居」から西に展望できたろうし、またサンフラン

シスコをも示す。そこへの「客」來訪者とは、楊氏自身。

つぎは「六月九日、紀君〔伯納〕Bernard Key の歐洲に遊ぶを送る。右二首、柏克萊 Berkeley の作」と自注される第四首。

薄天鵬翼羽毛輕　天に薄る鵬翼　羽毛輕く
滄海茫茫問去程　滄海茫茫として去程を問う
涼雨連陰新霽後　涼雨　連陰　新たに霽れし後
衆星錯落送君行　衆星錯落として君が行を送る

さらには、「東海道車中の作一首を附す」という注をつけられたヨーロッパでの諸作「歐に遊ぶ雜詩」四首をあげたいが、その前にモスクワの前に滞在されたレニングラード、今のサンクトペテルブルグの様子をつづられた「レニングラードのこと」（「圖書」一九六五年一月）から、先生の戯作一首をあげよう。

甃街疎雨晩飄蕭　甃街　疎雨　晩に飄蕭たり
大帝遺構隔暗潮　大帝の遺構　暗潮を隔つ
遙憶姑蘇終不若　遙かに憶う　姑蘇　終に若かざるを
石欄三百五十橋　石欄　三百五十橋

「甃街」は石畳の街路。「大帝」はレニングラードの前身サンクトペテルブルグを開いたピョートル大帝。

後半は、唐の白居易の「姑蘇」蘇州をうたった「正月三日閑行」詩に「綠浪東西南北水、紅欄三百九十橋」とあるによって、レニングラードの三百五十もある石橋と比較される。

それでは、「遊歐雜詩」の「八月二十日、瑞士國の旅舍にて。Zürich」と自注される第一首。

始出赤都復浪遊　始めて赤都を出でて復た浪遊す
恍如身在古杭州　恍として身は古杭州に在るが如し
湖山明麗殊佳絶　湖山の明麗　殊に佳絶
照水夕陽正是秋　水を照らす夕陽　正に是れ秋なり

ソ連の「赤都」モスクワからスイスのチューリヒにやってきて、市街の東南に廣がるチューリヒ湖の、杭州の西湖を思わせる風景をご覽になっての感慨。

つぎは「八月二十九日、巴黎（パリ）Paris の公園の卽事」と自注される第二首。

水鳥浮浮野雀翔　水鳥浮浮として野雀翔り
啜茗閑坐獨乘涼　茗（ちゃ）を啜（すす）り閑坐して獨り涼に乘ず
遊人兩兩皆携手　遊人兩兩　皆な手を携う
白日西斜橡葉黃　白日　西に斜めにして橡葉（マロニエ）は黃なり

これはパリの歷史古く廣大なモンスーリ公園での見聞。この公園はパリの中心から南の一四區にあり、國際學生都市の眞向いにあたる。この詩のうたう情景については、先生の「茶を飲む話」（「文藝春秋」一九六五年一月）に詳しい。

つぎは「九月三日、孟田（モンテーニュ）Montaigne の故居を訪（おとな）いての作 Bordeaux」と自注される第三首。「孟田」は「エセー」七卷の著者で、一六世紀ルネサンス期のフランスを代表する思想家モンテーニュ（一五三三－一五九二）。かれの「故居」はペリゴール地方のボルドーに近いモンテーニュ城。

綠野清而秀　綠野は清らかにして秀で
停車忽眼明　車を停（とど）むれば忽ち眼明らかなり
古賢著書處　古賢　書を著す處
百載永播聲　百載　永く聲を播（ひろ）む

つぎは「九月十一日、將（まさ）に巴黎 Paris を去らんとしての口吟」と自注される第四首。

故鄉初出立春前　故鄉　初めて出づ　立春の前
汗漫之遊逾半年　汗漫の遊　半年を逾（こ）ゆ
若問牽情何處最　若（も）し情を牽（ひ）かるるは何處（いずこ）か最もなると問わば
賽因河畔綠楊邊　賽因河畔（セーヌ）　綠楊の邊

「汗漫之遊」は、廣々と限りない旅で、「淮南子」道應訓の、盧敖が怪仙にあい、共に遊ぼうと思ったが、怪仙は笑って「吾れは汗漫と九垓の外に期す。吾れは以って久駐す可からず」といった一段による。「賽因河」はパリの中央を東西に流れるセーヌ河。

最後は「九月二十三日、東都を發ちて西京に歸る車中の作」と自注される、東海道線での附錄の一首。

乍脫征衫着舊衣　乍ち征衫を脫ぎ舊衣を着す
離家數月夢依稀　家を離れて數月　夢みること依稀たり
昏昏海氣颶風近　昏昏たる海氣　颶風近く
驟雨打窓山影微　驟雨　窓を打って山影微かなり

「颶風」は臺風第二〇號で、この日は北上して九州に近づきつつあった。

そして昭和四九年（一九七四）四月、先生は京都大學教授を定年退官されたが、その年の七月、奥様とともにヨーロッパを旅行された。そのおりの作が、金田純一郎氏の「思ひ出すまゝ」に載せられている。金田氏に贈られた色紙の七絶には「乙卯元旦試筆書舊歲遊歐雜詩」と題され、旅行の途中、スイスのオーバーラント地方に聳えるアルプスの巨大な「處女峰」ユングフラウの正面までロープウェイで近づいたときの感慨を記されている。

鐵纜挂空徐上巔　鐵纜　空に挂かりて徐ろに巔に上り
此身疑是挾飛仙　此の身は疑うらく是れ飛仙を挾むかと
倚窓四顧景奇絶　窓に倚りて四顧すれば景は奇絶
處女峰頭白雪妍　處女峰頭　白雪　妍なり

「鐵纜」はロープウェイで、ここはおそらくユングフラウ三山（アイガー・メンヒ・ユングフラウ）を觀るに絶好のメンリッヒェン展望臺にウェンゲンから登るそれだろう。

第二句は、蘇軾の「前赤壁の賦」に「吾が生の須臾なる

を哀しみ、長江の無窮なるを羨む。飛仙を挾み以って遨遊し、明月を抱きて長終す」とある。

さて、最後には小川先生の一周忌に奥様からいただいた色紙に掲載された詩を紹介したい。この詩の書影は「小川環樹著作集」第三卷の卷頭にかかげられているが、詩題は「戊午、遊を紀す作」とあり、關防印は「衣笠山南是我家」の雙行朱文印（行書）が、落款は「環樹」の白文印（六國古文か）と「士解」の朱文印（篆書）が捺してある。色紙の由來については、その卷の山本和義氏の解説にいう、

本卷の口繪として掲げた色紙は、一九七八（昭和五三）年、中國での紀行詩（七言絶句）を、五年後の一九八三（昭和五八）年に揮毫されたものであり、一九九四年八月、京都・東山二條の大恩寺で一周忌の法要がいとなまれた際、その複製（鳩居堂）が精子夫人から參會者に贈られた。色紙には先生自らの手に成る釋文と注が添えられている。

「戊午」昭和五三年（一九七八）、先生は四十二年ぶりに中國を訪問、桑原武夫・橋本峰雄・司馬遼太郎氏らとともに、上海・蘇州・南昌・廬山・廣州を旅行された。この「遊」旅行については、先生の回想「四十年ぶりの中國」（「飈風」第一二・一三號、一九八〇年四月・一九八一年九月）に詳しい。この詩はその四月一一日、八時に江西省の省都南昌をバスで出發、五時間半かけて東方の廬山に到着する途中の見聞を詠われたものである。その詩をあげれば、

贛江橋畔路初東　贛江橋畔　路は初めて東す
遙望匡廬無數峯　遙かに望む　匡廬無數の峰を
雨過天青遍地綠　雨過ぎて天青く　遍地綠なるに
花開處處暎山紅　花開いて處處　山に映じて紅なり

この詩に添えられた先生の釋文にはいう、

（一）カンコウは、（江西省）南昌市の近くを流れる大きな河です。その所にかかるカンコウ大橋を北へわた

ったのが第一句ですが、韻を合わせる爲め、北を東としましたのは私のさかしらです。（二）キョウロは廬山の別名、實際數十の峰が立ちならぶ大きな山です。第三、第四の句は實景ですが、（三）の映山紅は實はツツジの別名で、ちょうど私どもの通った路ばたに咲いていました。五年前の四月初でしたが、江西省は暖かい地方ですから、京都などより早く開花するのだと思います。昭和五十八年　小川環樹

（なお題は「廬山道中」としたはずですが、ロザンへゆく途中の作です）

「贛江」は、福建の武夷山西麓を水源とし、南から北上して江西省を縦貫して鄱陽湖に注ぐ大河。その下流は南昌の市街地を南北に貫通する。「匡廬」が廬山の別名なのは、周の威烈王のとき匡俗なる人物が廬山で仙道の修行をしたからである。

「雨過天青」は、雨が上がって青空になったことで、清の朱琰の「陶說」巻二によれば、五代後周の世宗は、御用窯の柴窯で焼く磁器の様式はどうすればよろしいかとの伺いに、「雨過ぎ天青く雲破るる處、者般（しゃはん）の顏色を作り將（も）ち來たれ」と指示したという。のち空の青さのような釉色を「雨過天青」というようになった。

さて、小川先生の漢詩を紹介し來たったわたしの文章はここで終わる。先生の實際の詩作數はこの何倍にもなると思うが、しかも小川先生から詩をいただかれた方も知っているが、わたしの目に觸れた漢詩は以上に盡きるからである。わたしは先生には大學や讀蘇會などを通して二十年あまりご指導を賜ったが、その間、先生がご自身の漢詩について語られるのを聞いたことはなく、またわれわれに漢詩の創作を勸められることもなかった。

また、小川先生は一九八六年五月、蘇軾の足跡をたどり、北京から成都、重慶、そこから三峽を下って武漢に至る十日ほどの旅をされたが、その經過は先生の「三峽をくだる記」（「以文」第二十九號、一九八六年八月）に詳しい。このとき、わたしは讀蘇會の幹事をしていたからか、先生ととも

に河原町御池西の旅行社までいって手續きのお手傳いをしたり、そして旅行にまで御伴させていただいた。この旅の間、先生は中國社會科學院語言研究所・文學研究所の諸先生や四川大學・武漢大學などの諸教授と學術上の交流はされたが、これらの學者たちと詩の應酬をされたことはなさそうであり、わたしが氣づかなかっただけかもしれないが、ご自身が詩作された様子もなかった。

これと對照的なのが、吉川幸次郎先生である。先生は機會があれば積極的に作詩をされ、またご自身の詩詞を「不朽」のものとして後世に殘すべく、意圖されていた。先生が自ら編まれた「知非集」「知非續集」（いずれも「吉川幸次郎全集」第二十卷）「知非三集」（「吉川幸次郎全集」第二十七卷）がそれを示す。

また、中國古典詩を研究するものは、自ら詩を作ってこそ、本當に中國の詩を理解できる、という確固たる信念を吉川先生はお持ちで、それゆえに自らの學生には、つねに漢詩の創作を奬勵され、漢詩創作の授業もされていたらしい。先生の晩年、上賀茂の羽田記念館でわたしが先生の「杜甫詩注」執筆のお手傳いをしていたころ、先生は未熟なわたしでも研究者の端くれと見てくださったのか、テーマは何でもいいから漢詩・漢文をとにかく作ってこい、添削してやろう、と言ってくださった。そのご厚意に抗しきれず、つたない漢詩（主に七言絶句）を數首作り、先生のご指示で半紙に毛筆でしたためたもの（間に合わせた字は拙劣きわまる、もっと書道の練習をしておけばと後悔したが手遅れだった）を、冷汗とともに何度かお見せした。先生は朱筆で不當な字を改めてくださったり、これは好いとおもわれた字の横には圈點を打ってくださった。ときには漢文も添削していただいた。當時の先生の朱を載せた何枚かの半紙は、先年勤務先を退職したおり、藏書を整理する中で偶然見つけ、いまも手元にある。

また、やはり羽田記念館で休憩のおり、わたしが古詩の作り方についてお尋ねしたところ、それならぜひこの本を讀め、といわれて、お手持ちの江戸時代の漢詩人たる武元登登庵（元質）の名著「古詩韻範」五卷三冊、文化乙亥（十二年）清風閣刊本、をくださった。これには「齊明樓

圖書印」「後凋館藏書」の印記がある。しかし、今に至るまでわたしはほとんど古詩を作っておらず、ただただあの世の先生に申し譯なく思うばかりである。

また、一九七九年三月、吉川先生は杜甫の足跡をたどり、北京・洛陽・西安・成都・重慶とまわり、三峽を下って、武漢・上海に至る三週間あまりの旅をされた。その間、北京の中國社會科學院文學研究所や各地の大學の諸學者と學術上の交流をされるのはもちろん、作詩のできる學者たちときわめて熱心に詩の唱和をされた。その發端は先生の未完となった「訪中詩事」や「杜蹟行」（「吉川幸次郎全集」第二十五巻）に描かれている。わたしはこの旅にも御伴させていただき、先生の當地の學者に全く引けを取らぬ見事な應酬を目の當たりにして、大いに刺激され、なんとか漢詩を數首作ってみた。先生はすべてに目を通してくださり、長江の船上で作った五律一首（拙論「現代中國における舊詩の諸相」「アジア・クォータリー」第12巻第2・3合併號、一九八〇年六月、に付載する）は末句の一字を改めていただいた。

また、「杜甫詩注」第一册刊行のおりには、「深澤一幸に眎（しめ）す」（「知非三集」）と題する七言絶句を、頂戴した「詩注」の扉に毛筆で書き入れていただいた。NHK大學講座「杜甫詩抄」で先生のお手傳いをしたときは、わたしと金文京氏が同時期に結婚したのを喜ばれて、「兩生新婚の歌」（「知非三集」）と題する長編の七言古詩を、こんなに大きなものを書いたのははじめてだよ、とおっしゃりながら條幅の宣紙に二枚したためてくださった。

この兩先生の比較から浮かび上がるのは、小川先生の漢詩にたいするストイックな態度である。先生は「談往閑語」（筑摩書房、一九八七年一月）に收める隨想で自作の漢詩を數首披露されてはいるが、世間に公表することをそれほどは好まれなかったようだ。それゆえに自作の漢詩を詩集に編まれることなどもなかったように思う。わたしがこの紹介文を書くきっかけとなったのは、他の必要で調査した今關天彭氏の雜誌「雅友」で偶然先生の漢詩を發見したことであり、このまま埋もれさせておくのはあまりにも惜しいと思ったのである。また受業生として、恩師のかくれた業績を顯彰することにもなる。しかしながら、力は意にそ

ぐわず、たったこれだけしか紹介できなかった。願わくは先生ゆかりの方々がこの文章を讀まれ、未知の先生の詩作を公表され、將來の「小川士解先生詩集」編纂に資するものとならんことを。